

CG+シナリオ



Natsuki Training scenario Dark Monster vol.1

体験版



闇夜に這い寄る漆黒の肉体が
ナツキの雌を呼び覚ます——

◆CONTENTS

- ・闇夜の闘い
- ・墮とされて

被検体N ナツキ

茶髪のショートカットに青い瞳、黒いレジャージャケットにデニムミニスカート、黒いパッドが目印。

シティーソルバー(街の解決人)として蒼栄市を守るヒーローであり、魔獣増殖による支配を目論む異胎機関が追い求める「最高の魔獣を生み出すための器」。

正義感が非常に強く、街の人々を救うために自分の身を犠牲にすることもしばしば。機関にはその性質を逆手に取られ、人質の代わりに自分が受胎対象として魔獣との交配を繰り返されている。度重なる交配実験の結果、ナツキの子宮は魔獣を着床する適応率が上がった。皮肉にも彼女自身の肉体修復力、身体能力も大幅に上昇させることとなる。

実験内容は断片的にしか覚えておらず、精神崩壊が起きないように機関によって記憶を消去されている。

目隠しをされて調教を施されたことにより、以降どんな時でも目隠しをされると大人しく従ってしまう。例えば恥辱を伴う行為でも実行するよう徹底的に調教された。

今まではリ・ガーズと呼ばれる民間組織として連携して街の警護にあたっていたが、リ・ガーズ社内に汚職が進んでおり、ナツキをあえて機関の実験に差し出す始末だった。

とある男(相棒)が現れたことにより、リ・ガーズの方針が転換。男を中心にナツキをフォローするような体制に切り替わる。

身を挺して自分を庇ってくれた初めての存在である相棒を信頼している。

機関の調査結果により、相棒の遺伝子にナツキの器を促進する効果が秘められている可能性が浮上し、今後ナツキの器促進に利用されることが懸念される。





闇夜の闘い

「この街はあたしが守るんだから！！」

今日も、ナツキは街に現れる魔獣たちと一人孤独な闘いを繰り広げる。

異胎機関の魔獣の目的は街を混乱に陥れること、そして受胎に適した女性を誘拐することにある。

受胎の器として最適に改造されたナツキは誰よりも魔獣を寄せ付ける。そのため、彼女が魔物と闘うことで被害に遭う女性は減っていた。

代わりに、ナツキには数々の魔の手が迫る——。



「ちょっと！！何触ってるの！！」

ガバツと魔獣が後ろからナツキを捕まえて

パンティーの中に手をつっこんでナツキの大陰唇をこねくり回す。

「やっ……ちよっ、いやっ！！」

クチュクチュ クチュツ

ナツキの膣から湿ったいやらしい音が聞こえ始める。

「ガハハハ！！もう濡れてんじゃねえか！！この淫乱女がよ！！」

「…っ、そんな訳ないでしょ！！」

ナツキの柔らかい膣内に指を潜り込ませながら魔獣が挑発する。魔獣の言った通り、ナツキの膣口には透明な液体がこぼれ始めていた。

魔獣の仔を孕むため敏感にされた体は、魔獣と闘うだけで濡れてしまう。

その上、刺激に抗うことなどできはしない。

「くっ…ううう……！！」

これ以上弄られると、スイッチが入ってしまう——。ナツキは今までの経験から焦りを感じ始める。



「ギャハハ！！俺も混ぜろ！！」

「やめっ...！！」

動きが鈍くなったナツキに別な魔獣が襲い掛かる。不気味にねじられた腕がナツキの顎を掴み、口の中に指を入れ込む。

ブラジャーが跳ね上げられ、ぶるんと震える乳房から汗がはじけ飛ぶ。

「おおおお！！たまんねえ匂いだなああ！！！」

ナツキの汗には魔獣を興奮させる匂いが混じっている。彼女が激しく動けば動くほど、魔獣たちはよりナツキを孕ませようと活発になるのだ。

「おまんこの具合もさぞいいんだろうなあ！！早くやらせてくれよ！！」

「あ、あんたなんかに.....！！.....誰が！！」

震える体を必死に抑えて、魔獣から逃れようと力を込める。

これ以上襲われると屈してしまう、早く魔獣たちを倒してしまわないと。

魔獣の腕を振りほどき、距離を置こうとしたナツキの頭上から別な魔物が降ってくる。



ガッ！！！！

「！！？」

突如上から降ってきた魔獣に首を締められ、開いた口に陰茎を捻じ込まれる。

身のこなしが軽そうな小さな魔獣がナツキの口内を犯し始める。

ジュポッ ジュポッ ジュルルル

「うっ……ぐお……ご……」

呼吸ができずに苦しい声をあげる。魔獣はナツキの表情などお構いなしにさらに奥に奥にペニスをねじこむ。

ジュポッ ジュボジュポッ

「ごえっ……！！うお……ぐお……」

乱暴にされたことでナツキの気持ちちがガクンと快楽に傾きかける。無理矢理犯された実験の数々がフラッシュバックし、ナツキを精液を欲しがる体に変えていく。

「(苦しいけど……気持ちいい……ダメだ……ヤバイ……)」



「なあ、オレにもやってくれや」

ナツキから小さな魔獣を引きはがした別の魔獣がペニスを無理矢理ねじこんでくる。

「うっ...！！ぐう.....！！」

頭がぼんやりとしてくる。

「(受け入れちゃってる.....口の中...気持ち...いい.....)」

体が魔獣の精を喉が欲しがっている。言いなりになったら、この後は意識を失うまで犯されるだけだ。

「(なんとか.....しないと.....)」

「オラ！ちゃんと舌使ってちゃんと奉仕しろや！！」

「...おごっ.....じゅるっ...じゅる.....」

ジュポッ ジュポッ

言われた通りに魔獣の肉棒を丹念に舐める。先から垂れてくる液がナツキの喉を通り過ぎる。

「(.....体、喜んじゃってるよ.....)」

雑に扱われることに喜びを感じるナツキの体。性欲が徐々に高まってくるのがわかる。



「オレにもやらせろや！！！」

違う魔獣が次々とナツキの膣目掛けてちんぽをぶち込んでくる。

柔軟性に富んだナツキのまんこは魔獣の極太の棒でもいとも簡単に受け入れてしまう。

「よく見ろ！！ちんぽを咥えてるお前のまんこをよ！！」

「言ってなよ...んっ♥...あんたたちは...絶対...倒すんだから.....」

一度快楽に流された気持ちをなんとかギリギリのところで押しとどめる。

「ギャハハ！！このザマになってもまだ言うかよ！！いいぜ、もっとやってやる！！」

パンツ パンツ

汁が飛び散り、ナツキの尻肉がぶるんぶるんと揺れる。

「(負けない...気持ちで負けちゃ...ダメ...)」

必死に快楽に負けまいと気持ちを奮い立たせるナツキ。



「オラ、腰振れや！！」

バチーン！！

真っ赤に腫れ上がるほどナツキの尻を魔獣が叩く。

「痛っ！！！！やっ、やめてよ！！」

「お前が負けを認めるまで何回でもやってやるよ！！」

バチンッ！！

魔獣はナツキの片足を持ち上げてちんぽを更に膣奥に突き刺す。

「オラッ！！！！ザコだなあ、すっぱり喰えるじゃねか！！！！」

「あっ♥い、いや、.....やめ...て！！！！」

「やめるわけねえだろ！！バカかお前！！早速一発出してやるよ！！」

ビュビュッ！！

激し射精がナツキを徐々に浸食していく。気持ちでは強まっているが、魔獣の精液を二度も放たれては子宮が活発に活動を始めちゃう。

「(いや.....負けたくない...のに.....)」





「オラ、ただまんこゲット！！」

「んっ！！あああつつ♥」

激しく突かれた衝撃で思わず喘ぎ声が出る。

パンツ パンツ♥

魔獣の乱暴な上下運動に抵抗しようとするが体はもうすっかりペニスの虜になっていた。体に指令を出してもまったく動けない。むしろ、魔獣に体を預ける体勢になってしまっている。

「あっ♥あっ♥」

「可愛く啼くじゃねえか！さっさとそうしてりゃいいんだよ！」

魔獣は満足そうにナツキを抱くとピストンのスピードを早めていく。

「おお！！良い締めつけた！！」

「ダメッ♥ダメだからっ♥」

ズポッ ズポッ

魔獣のペニスは更に深くナツキの膣奥へと入り込んでいく。



「ザコ！！ザコまんこ！！もっと締めろ！！オラ！！」

ブビューッ ブビューッ！！

魔獣の精液がナツキの子宮を小刻みに叩く。

「あああっ♥あっ♥あっ♥あああ♥」

ナツキの声がだんだんと大きくなる。

注ぎ込まれた白濁液がナツキの抵抗力を押し流していく。膣内を圧迫する黒い滾り棒はナツキの性欲を満足させるのに十分な効果を発揮していた。

「負け……負け…ちゃダメ♥……あっ♥」

もうじき、自分の抵抗する意識が飛んでいく。それではダメだ。ダメなのに。

ナツキは愛する相棒のことを思い出し、必死に抵抗する。

「ダメ……あたしは、お前たちを…倒して相棒のところに…だから…」

「ザコが何言ってるんだ！！オラ、もっとわからせてやるよ！！」

「やだっ♥や…だっ♥…イ、イクッ♥」

Pixivにてナツキの敗北ストーリーを公開中



DLsiteにて魔獣カタログ販売



■奥付

発行: zeta exp(ゼタ いーえくすぴー)
連絡先: zetazetazetazeta999@gmail.com

発行日: 2026年1月20日

※本作品に関する 著作権はすべて作者に帰属します。
インターネット上へのアップロード、SNS等への投稿・複製・配布・販売を固く禁じます。
発覚した場合、法的措置を含む対応を取る場合があります。